道下匡子《日本の中で女であること　海と生きる》にみる女性間の対話と記録 ―― 1970 年代のウーマン・リブを背景として

原口 寛子 （大阪大学）

本発表は、1970 年代の日本のウーマン・リブを背景に、女性アーティストのヴィデオ作品における表現の意義と運動上の位置づけを、道下匡子《日本の中で女であること　海と生きる》（1974）を事例に明らかにすることを目的とする。

戦中の樺太に生まれ、引揚げ後は北海道に育った道下匡子（1942-）は、高校卒業後にウィスコンシン大学に進学し、アメリカのフェミニズムに関する数々の著述や翻訳を手がけた、先駆的フェミニストとして著名な人物である。一方で、彼女が東京アメリカン・センターのプログラム・スペシャリストとしてアメリカの文化芸術を紹介する立場にあったことや、1970 年代初頭より多くのヴィデオ作品を制作したアーティストであることはあまり知られていない。彼女の作品は発表時には高く評価されていたものの、視聴が困難であることから、詳細な研究や批評はほとんどされてこなかった。《日本の中で女であること　海と生きる》は、近年修復が完了した初期作品の一つである。女性ヴィデオ・アーティストとウーマン・リブの関わりを考察する研究はこれまで極めて少ないが、本作の内容と制作手法をみることで、ウーマン・リブが重視した女性たちの連帯および自己探索との接点を見出すことができるだろう。

本発表では《日本の中で女であること　海と生きる》が、女性アーティストの個人的試みであると同時に、地方に暮らす女性労働者を取材したものである点に着目したい。本作は道下の兄が暮らす北海道厚岸郡浜中町霧多布にて、昆布漁業に従事する女性とその家族を取材した 51 分間のヴィデオである。女性による女性の声の記録は、1950 年代以降、森崎和江をはじめとした女性史研究者や評論家によって日本各地で活発に取り組まれ、先進的な仕事としてウーマン・リブの女性たちから支持されていた。インタヴューや撮影など、本作の制作はすべて道下一人の手によるものであり、作中では女性が息子・娘と船に乗り、一家を支える「強い母」として描かれている。このような女性像は、都市部とは異なる女性の自立のあり方を提示するものであると思われる。さらに、ヴィデオの特徴的な機能である長時間録画と同時録音を活用することで、自宅や浜辺、漁船内など、様々な場所での女性間の対話の状況を記録することに成功している。

本作は、タイトルが示すとおり道下が「日本の女性」を訪ねた旅の記録であり、女性が主体的に働き、語る声と姿をヴィデオで可視化するものである。これはウーマン・リブに影響を与えた女性への聞き書きや地域女性史に連なるものでありながら、クリエイティヴであることを重視した 1970 年代のフェミニスト特有のアプローチであると考えられる。本作は、女性アーティストのヴィデオが、日本のウーマン・リブにおける芸術実践の一例であると言えよう。